

異世界 子育てしながら冒険者します

ゆるり紀行

12

Minazuki Shizuru
水無月静琉

ジュール

タクミの契約獣となった
フェニリル。
小型にもなれる。

フイト

タクミの契約獣となった
飛天虎。小型にもなれる。

ボルト

タクミの契約獣となった
サンダーホーク。

タクミ・カマノ

異世界に風神の眷属として
転生した本作の主人公。
アレンとエレナの保護者。

マイル

タクミの契約獣となった
フォレストラット。

アレン

水神の子で、妹・エレナと
ともにタクミに保護された
少年。格闘術が得意。

エレナ

水神の子で、タクミに
保護された少女。
格闘術が得意。

ベクトル

タクミの契約獣となった
スカーレットキングレオ。
小型にもなれる。

登場
CHARACTER
人物

第一章 船旅をしよう。

僕は茅野巧^{かやのたくみ}。元日本人。どうして「元」かと言うと、一度命を落としてしまったからだ。

その原因は、エーテルディアという世界の神様の一人、風神シルフィールのうっかりのせいだったりする。そして、そのことに責任を感じたシルフィール——シルは、僕を自分の眷属^{けんぞく}としてエーテルディアに転生させてくれたのだ。

しかも、最初に降り立った場所がガヤの森という危険な森で、さらにさらに！そこで双子の子供を保護することになる。

双子は身寄りがなかったのでアレンとエレナと名づけ、僕の弟妹として一緒に生活することになったのだけど、しばらくして水神様の子供と判明した。まあ、判明したところで、生活に変わりはないんだけどね。

ただ、二人は意外と戦闘好きということもあって、最近では僕よりも子供達のほうがレベルが高くなっている。それでちよつと情けなく感じていたんだが、少し前に僕達が今いるところ、お世話になっているルーウェン伯爵家^{はしごうけ}が治めるルイビアという街の近くでオークの巣が発見された。僕も

その討伐に参加して大量のオークを倒したため、しっかりとレベルを上げることができたのだ。
何とか子供達のレベルを追い抜くことができたので、正直ほっとしている。

そんなオーク討伐から数日。

ここ数日は報告書や素材についてなど……主に後始末に追われていて、やっと手が空いたので、子供達との約束を果たすことにした。

僕がオーク討伐に出かける際、子供達にお留守番をする条件として、僕が戻ってきたら好きなどころへ行こうと約束していたのだ。

「アレン、エレナ、どこに行くか決まった？」

「あのね、あのね！」

僕が尋ねると、子供達は満面の笑みになる。

「アレンね」

「エレナね」

「おふね、のりたい！」

行き先ではないが、二人はやりたいことをしつかりと決めていた。

「港で見たやつだね？」

「うん！」

「大きいほう？ 小さいほう？」

「おっきいの！」

大きいというのは、漁船ではなく商船だな。

「じゃあ、まず乗れる船を探さないといけないな。今日は港に行つて情報収集だな」

「わかったー！」

さすがに今日すぐに……というわけにはいかないので、まずは船の出港する日や行き先なんかを調べるために、港に行くことにした。

「ふーね、おふねー♪」

港に向かって歩きながら、アレンとエレナは機嫌よく歌う。

「さて、旅客船の管理は……あそこかな？」

「おふねのかんばーん！」

「そうだね。とりあえず、あそこで聞いてみよう」

「うん！」

まずは目についた、船の看板が掲げられているお店に向かう。

「こんにちはー」

「こんにちはー」

「いらっしやいませ」

「すみません、こちらは商船の店で合っていますか？」

「はい、そうでございます」

目的の店だったようだ。

ホッとしていると、受付の女性が尋ねてきた。

「乗船をご希望ですか？ それとも荷物の配送ですか？」

「乗船したいんですが、ここから出港する船はどこ行きになるんですか？」

まずは一番大切なことを確認する。

「セルディーク国のビルドという街に行くものが多いですね。あとは少数ですが、北上してアルゴ国とクレタ国行き、ガディア国内ですとヨランの街行きがあります」

へえ、三つの国に船が出ているのか。ヨランの街は、ガディア国の南東。ここルイピアと、以前滞在していたベイリーの街の、ちょうど真ん中あたりの街だな。

「アレン、エレナ、どこに行きたい？」

「いったことないところ」

「ははっ、どこも行ったことないよ」

ヨランの街はもちろん、アルゴ国、クレタ国の海沿いの街も行ったことがない。セルディーク国に関しては、国自体にも行ったことがない。

「そうだな、せっかくなら行ったことがないセルディーク国かな？」

「うん、そこがいいー」

というわけで、行き先はセルディーク国のビルドの街に決めた。

「ビルドの街行きでしたら、船の大きさはその都度違いますが、三日に一度出港していますね」

「へえ、結構出港しているんですね。そうだな、なるべく大きな船がいいかな」

「それでしたら、五日後のものが良いかと。ただ、船足が少しゆっくりになりますので、午前に出港して翌々日のお昼着となります」

じゃあ、船で二泊ってことだな。そのくらいなら問題ない。

「じゃあ、五日後のビルドの街行きの船に、大人一人、子供二人で予約したいんですが、空きはありますか？」

「えっとですね……^{すす}勧めておいて申し訳ないのですが……」

「あ、もしかして、いっぱいですか？」

「いいえ、まだ空きはございますが……空いているお部屋のランクが少々不向きかと思ひまして」
受付の女性は、とても言い辛そうにしている。

部屋のランクか。そうだな、一律の乗船料ではないよな。

「えっと……まず部屋のランクについて教えていただいてもいいですか？」

「はい、部屋のランクは全部で四つ。上からご説明しますと、まずは特等室になります。特等室は広めの寝室にバスルーム、テラスがついている個室となります。次の一等室は寝室のみですが、個

室となります。二等室は二段ベッドの四名相部屋。三等室は十名から十二名ほどの相部屋となります」

個室と相部屋か。まあ、理想は個室だよな。

「それで、空いている部屋というのは、どのランクなんですか？」

「特等室と三等室になります」

「なるほど」

きつと特等室は貴族や富豪向けで値段が高く、大人数の相部屋も子供連れの僕達には不向きという事で、どちらも勧め辛かったのだろう。

でも――

「じゃあ、特等室をお願いします」

「……え？」

僕の言葉に、受付の女性は驚いた表情で固まってしまった。

「と、特等室はお値段が張りますがよろしいのですか？」

「はい、大丈夫です」

「本当によろしいのですか？」

僕が正確な料金を聞く前に乗船を決めてしまったからか受付の女性は再確認してくるが、僕達の稼ぎは貴族や富豪達に引けを取らないと思うので問題ないだろう。

「それでもAランクの冒険者をしていますから、稼ぎはあるんですよ」

「そ、そうなのですね。失礼しました。では、ご予約を承ります」

料金の半分は先払いで、残りの半分は乗船する時に支払うことになるようなので、さくつと前金を払ってしまう。

ちなみに料金は、僕達なら一回の薬草採取で充分に稼げるくらいの金額だった。僕としては意外と安い？　と思ったのだが……一般家庭なら二、三カ月生活できる金額であるようだ。

それから渡航中の注意事項などを聞いて、お店を後にした。

「じゃあ、準備期間は今日も入れて五日だな」

無事に船の予約ができたので、旅の準備を始めることにする。

とはいっても、物資は《無限収納^{インベントリ}》にたっぷりあるので、改めて用意するものはほとんどない。

あ、でも、船旅に必要なものを調べる必要があるな。持っていないものがあれば買わないと。

あとは主に挨拶^{あいさつ}だな。セルディーク国へ行った後は、時期的にここには戻ってこれないと思うルーウェン家次男、グランヴァルト・ルーウェン様の結婚式に出席するために直接王都に向かうことになるだろうからな。……いや、この街には戻って来るか？　ただ、ほとんど素通りになる予定だけだな。

まあ、このルイビアの街は僕達の実家と言える場所なので、二度と来ないということはない。ちよつと出かけてきます。くらしいの挨拶で十分だ。

あゝ、でも、孤児院に遊びに行ったり、パステルラビット仲間の冒険者のメレディスさんの娘さんと会ったり、食堂のオヤジさん——ミルトンさんと大量のフライ作りをしなくてはならないな。

「今日はこのまま街をぶらぶらしつつ買いものをして、最後に冒険者ギルドに顔を出すか」

「わかったー」

それから、親しくなった冒険者のエヴァンさん、スコットさんには挨拶をしたので、夕方を目途にして冒険者ギルドに向かうことにした。依頼に出ていても帰って来る時間帯だからな。それでも会えなかったら、宿を訪ねればいい。

「で、あとは時間がある限りレベッカさんやルカリオくと過ごそうか」

「うんー」

子供達が「おばあさま」と慕^{した}っているルーウェン伯爵夫人のレベッカさん、レベッカさんの長男、グランヴェリオさんの息子であるルカリオくんとはらく会えなくなる。なので、今のうちにしっかりと遊んでおくように言えば、アレンとエレナは満面の笑みで返事をした。

王都からレベッカさんがいなくなる時は泣いていた二人だが、今回はそんなに寂しそうではないな。やはり、自分達が旅立つのと相手が旅立つて行くので違うのかな？ それとも、すぐに会う予定があるからかな？

「今回は、別れは寂しくないのかい？」

「あのね、あのねー」

子供達の心情が気になったので、聞いてみることにした。

「おみやげをね」

「いっぱいよういするの」

「それでね」

「いっぱいよろこんでもらって」

「いっぱいおどろいてもらうの」

「なるほど」

二人はたくさんのお土産やお土産話を用意して、喜んでもらったり驚いてもらったりすることを覚えたようだ。今から次に会う時のことが楽しみなんだろう。

「そうだな。いっぱいお土産を用意しような」

「うん！ おにいちゃん、ドラゴンみつけようね！」

しかも、お土産にドラゴンの肉を用意するという話をまだしっかりと覚えているようで、かなりやる気を見せていた。

◇ ◇ ◇

「じゃあ、行ってきます」

「いってきますー!」

「タクミさん、アレンちゃん、エレナちゃん、気をつけてね」

「あーう」

「タクミくん、また王都で」

「いってらっしゃい」

僕はレベッカさん、ルカリオくん、ヴェリオさん、ヴェリオさんの奥さんのアルメリアさんに見送られて、ルーウェン家の邸を出た。

五日前、ルーウェン家の皆さんに船旅に出かけることを伝えたのだが、そう驚かれることはなかった。

どうやら僕が留守の時、子供達に「ご褒美にどこに連れて行ってもらうの?」と聞いたところ、その時から「ふねにのりたい!」と言っていたらしい。なので、近々僕達が船旅に出るということとを予想していたとのことだった。

「寂しい?」

「……ちよつとだけ」

邸を出た後、子供達がちらちら後ろを振り返っていたので二人の頭を撫でる。

「セルディーク国にいるのは長くても秋の間だけ。冬になる頃には王都に戻るから、またすぐに会えるよ」

「うん、そうだね!」

今はまだぎりぎり夏だが、そろそろ涼しくなる頃だ。なので、二、三カ月後にはまた会える。

もしくは、数日観光したら、さっさとルイビアの街に帰って来てもいいのだ。それなら、一カ月も経たないうちに会えるだろう。

寂しさちよつと、わくわく大半といった様子の子供達だったが、港に着いた途端、感嘆の声を上げた。

「おっきい!」

「本当に大きいね。って、僕達が乗るの、この船か!」

「おお〜」

泊まっている船の大きさに驚いたのだろう。まあ、かなりの大型船だったので、僕も驚いたけどね。

そして、船と陸地を繋ぐ棧橋には、僕達が予約したお店の看板が掲げられていた。

「おはようございます。お待ちしております」

船に近づいていくと、予約した時の受付の女性が立っていた。

「この、ふね?」

「ええ、そうですよ」

「すーごー!」

やはり、この船で間違いないようだ。

「ここまで大きいとは思いませんでした」

「我が商会が所有する一番の船でございます」

「へえ、それは楽しみだ」

「お客様の船旅が安全に進みますよう最大限配慮させていただきますので、どうぞお楽しみください」

「はい、お願いします」

早速、料金を支払った僕達は、船へと乗り込み、部屋へ案内してもらった。

「こちらになります」

「おお」

「これは凄く」

ひと目で良いものだとかわかる家具や調度品が置かれている部屋だ。

「お気に召していただけました？」

「ええ、良い部屋ですね」

落ち着くかどうかはわからないが、良い部屋であることは間違いない。

そう思っていると、受付の女性が扉の一部分を示した。

「お手数ですが、こちらに魔力を流していただけますか」

「えっと、これは？」

「部屋の使用者を魔力で登録いたします。部屋の施錠は自動でされますので、出入りの際はこちらに魔力を流して扉をお開けください」

「へえ、そんな魔道具があるんですね」

この部屋はオートロックであるようだ。

扉の表裏に設置されている魔道具によって、魔力を判別して扉を開ける仕組みになっている。なので、部屋に入る時だけではなく、部屋を出る時も魔道具を作動させる必要があるそうだ。

「ありがとうございます。お子様もよろしいでしょうか」

「アレン、エレナ、ここに魔力を流してだつて」

「はい」

僕達は言われるがままに、入り口の扉にあった魔道具に魔力を流した。

「これで僕達以外、この部屋に出入りできなくなるんですか？」

「いいえ、あと船長が。それ以外は、船員でも以前にこの部屋をご利用いただいたことのあるお客様でも、開けることはできません。有事のことを考えまして、船長の登録だけはご容赦願います」

「ああ、確かにその措置は必要ですね」

部屋の中で客に異変があった場合、部屋を開けられなかったら助けることもできないしな。ちゃんと考えているようだ。

「うごいたー」

「本当だ、動き出したな」

部屋の中を確認していると、窓から見える景色が動き出していることに気がついた。

「アレン、エレナ、テラスに出てみよう」

「うん、でるー」

せっかくなので、出港する様子を見ようとテラスに出ることにした。

「はなれちゃうね〜」

「そうだな」

「あっ！ おばあさまー」

「えっ!? どこ?」

「あそこ!」

「うん? あ、本当だ!」

船は陸地に沿うように横向きに泊めてあり、僕達が借りた部屋のテラスは陸地側を向いていたので、ちょうど港から少しずつ離れていく様子が見られた。

少しだけ寂しい気持ちで離れていく陸地を見ると、子供達が港にレベッカさんがいるのを発見した。見送りに来てくれたようだ。

「おばあさまー!!」

アレンとエレナが大きな声で叫びながら手を振ると、レベッカさんもこちらに気がついてくれたようで手を振り返してくれる。

さすがに淑女であるレベッカさんが声を上げることはなかったが、小さく口は動いていた。

僕は読唇術^{どくしんじゆつ}なんでもものは使えないが、何となく「いつてらっしゃい」と動いていたような気がした。

「見送りに来てくれるなんて言っていなかったのに……でも、来てもらえて嬉^{うれ}しかったね」

「うん! あのね! おみやげ、がんばる!」

「ははっ、そうだね」

船が進み、レベッカさんの姿が見えなくなるまでテラスから港を眺めた僕達は、次は甲板^{かんばん}に行ってみることにした。

「そういえば、体調は大丈夫か? 気持ち悪くなったりしていないかい?」

「だいじょうぶー」

「そうか。それならいいけど、気持ち悪くなったらすぐに言うんだぞ」

「は〜い」

初めての船。船酔^{ふなよ}いはないかと心配したが、問題ないようだ。一応、酔い止めの薬は用意したんだが、今のところ僕にも子供達にも必要なさそうだな。

「おぉー」

甲板に出ると、子供達はすぐに船首に向かって走り出す。

「足下、濡れているかもしれないから気をつけるんだよ」

「はーい」

滑って海に落ちる……なんてことになれば大変だが、うちの子達なら注意さえしておけばそんなことにはならないと思うので、止めなくても大丈夫だろう。

「おおー」

船首に行くと、子供達は海を覗き込んで感嘆の声を上げた。

「どうした？ 何が見える？」

「うみがバシャーン、ってー」

「ん？ ——ああ、これか」

何を言っているのかよくわからなかったので僕も覗き込んでみる。

すると、船が海を掻き分ける時にできる波が凄かった。きっと、このことを言っているのだろう。

「ひゃっ！ つめたいー」

水飛沫がかかったように、子供達は可愛い悲鳴を上げる。

悲鳴と言っても、「きゃー、きゃー」言っているので、楽しんでいるのだろう。

「落ちるなよー」

「だいじょーぶ。おちないよー」

かなり身を乗り出して水飛沫を浴びようとしているので、ここでもまた注意しておいた。
しばらくすると満足したのか、二人は船首から離れる。

「おもしろかったー」

「あーあ、びしゃびしゃだなー」

「かわかしてー」

「はいはい、じゃあ、じっとして」

「はーい」

アレンとエレナは水飛沫でぐっしょり濡れていたの、すぐに魔法で乾かす。

「これでよし」

「ありがとう」

「どういたしまして。じゃあ、次はどうする？」

「おふねの」

「たんけん！」

「了解。さすがに船の中では騒ぐんじゃないよ」

「はーい」

甲板を満喫した僕達は、次は船の中の探検に繰り出すことにした。



「よっ！」

「どうも」

「えっ!? ちょっと待って! ええ? 本当に待って!」

船を探検中、エヴァンさんとスコットさんの姿を見つけた僕は、思わず声を上げてしまった。

「それだよ! タクミのその反応が見たかった!」

「いや、何でいるんですか!」

「護衛の依頼があったから受けてみた」

「はあ?」

エヴァンさんの話ではいまいちよくわからなかったので、スコットさんに顔を向けると、詳しい経緯を説明してくれる。

「商船には普段、商会専属の護衛が船に乗り込むものなのですが、急遽、冒険者ギルドに護衛の依頼があったのです。きっと人手が足りなかったのでしょう。それで、ギルドマスターから私達に『どうだ?』というお声がかかりました」

「護衛の人手が足りない? 何かあったんですかね?」

「たぶん、賊^{ぞく}だな」

「『ぞく?』」

「『ぞく?』」

理由を聞いて、僕と子供達が同じ疑問を口にする。すると、何故かエヴァンさんとスコットさんが噴き出した。

「さ、三人同時に首を傾げるって！」

「気が合っている証拠ですよ」

……どうやら僕と子供達は、同じ発言だけじゃなく、同じ仕草もしていたらしい。凄く偶然だけだね。

「それで『ぞく』って何ですか？」

「本当、おまえ達は仲が良いよね。賊っていうのは、あれだ。荒くれ者。海賊だな」

「ああ、なるほど。『賊』か」

そういえば、渡航についての注意事項には、海賊についてもあつたな。うつすら触れる程度だったけどね。

「わるいやつ？」

「そうだね」

「やっつけるー！」

「来ないほうがいいけど、来た時はエヴァンさん達の仕事だな」

僕の言葉に、アレンもエレナも首を傾げた。

「アレンはー？」

「エレナはー？」

「大人しく待機かな？」

「『ええ……』」

海賊をやっつける気満々の子供達を一応は止めておく。

「で、実際のところはどうなんですか？」

「最近、頻繁に襲われているらしい。だが、襲われているのは小規模、中規模の船だ。この船は大型だから、狙われる可能性としては低いだろうな。あ、これは裏の話だから、広めるなよ」

「了解です」

襲われる可能性が低いと言っても、冒険者ギルトに依頼を出して護衛の人員を増強するくらいだから、商会はかなり警戒しているのだろう。

「で、エヴァンさんとスコットさんは、今は仕事申すことですか？」

「そういうことだな。って言っても、航海が平和だったら、見回り程度の役目だけだな」

「そうなんですか？」

「ああ、客の相手をするのも仕事の内さ」

「……それはこじつけっぽいけどな。でもまあ、エヴァンさん達が問題ないって言うなら、船内の案内をお願いしますか？」

「おう、任せろ」

というわけで、エヴァンさんとスコットさんに案内してもらいながら、船内探検の続きを再開した。

「ここはー?」

「食堂だな」

「ここはーん?」

「ああ、一等室と二等室の客なら、ここに来れば三食食事が提供されるはずだ」

「あれ? 三等室は食事が出ないんですか?」

「いいえ、前もって注文していれば提供されます。ですが、船の食事は普通の食事より少々高くなりますからね。三等室を取る者は携帯食で済ます者も少なくありません」

「ああ、そういうことか」

特等室の食事は部屋に運んでくれるので、僕達はその辺の説明は受けていない。なので、初耳の情報ばかりだった。

「おい、初めて聞いたような感じだな。船に乗った時に説明を受けただろう? 船員の職務怠慢か? タクミ達の部屋はどこだ?」

エヴァンさんは、僕が説明を受けていないと感じたようで、表情を険しくした。

「部屋ですか? 特等室ですよ」

「うわっ、特等室だって!」

「おや、それは豪勢ですね」

しかし、僕達が特等室を借りていると聞いて、エヴァンさんの表情は一転、驚きの表情に変わった。スコットさんも驚いている。

「特等室か三等室しか空いていなかったんですよ」

「ああ、それなら特等室を選びますね。タクミさんは財力がありますしね」

「よく考えれば、確かにそうか」

僕達の稼ぎを少なからず知っている二人は、納得の表情を見せる。

すると、アレンとエレナがエヴァンさんに向かって胸を張った。

「おへや」

「すごかった」

「そんなに凄いのか。それは見てみたいな」

「いーよ」

「おっ、いいのか? 本気にするぞ」

「うん、おいで」

エヴァンさんと子供達って、地味に仲良しだな。

そう思っていたら――

「精神年齢が近いんですかね?」

「……」

スコットさんが僕と同じことを思ったのか、エヴァンさんに対してなかなか辛辣な言葉を零す。エヴァンさんには聞こえなかったようなので、反論の声は上がらなかった。

「本当にいいなら、俺達は今日、夕方から休憩なんだ。その時に邪魔するぞ」

「ゆうがたー？」

「ああ」

「わかったー。まってるー」

「あ、それなら、ご飯も一緒にどうですか？」

エヴァンさんとスコットさんを部屋に招待するのは問題ない。部屋は広いからな。

ついでに晩ご飯も誘ってみた。

「お誘いは嬉しいのですが、私達の食事は従業員用のものですので、特等室に提供される食事と並べて食べるのは少々……」

「さすがに同じ場所で違う料理を食べるなんていう意地悪はしませんよ」

スコットさんの言う通り、特等室の食事と従業員用の食事では、豪華さは確実に違うだろう。それはわかっている。

「僕のほうで追加注文できると思っていますよね。できなくても僕の手持ちの料理を出しますから、従業員のほうで出る食事は夜食にでもしてください」

「特等室の食事っていうのも魅力的だが、俺はタクミの料理がいいな！」

「そうですか？ それなら追加はしないで、僕の料理でいいですか？」

「おうー」

特等室の料理より僕の料理のほうが良いと言われると、悪い気はしない。

「タクミさん、本当にいいんですか？」

「もちろんです。ご飯は大勢で食べたほうが楽しいですしね」

「うん、たのしいー」

「なので、スコットさんが嫌じゃなかったら、ぜひ来てください」

スコットさんは遠慮しているようだったので、改めて誘うと嬉しそうな顔で頷いてくれた。

「まってるね」

客の案内も仕事の内だと言っても、さすがに二人をずっと拘束しているわけにはいかない。というわけで、一旦ここで別行動することになった。

そして、夕方。約束通りエヴァンさんとスコットさんが部屋を訪ねてきたのだが……部屋の内装を見て、エヴァンさんは子供達と一緒に子供のようにはしゃいでいた。

◇ ◇ ◇

船旅二日目。今日も快晴だ。

「おさかな、いるかなー？」

甲板に出ると、アレンとエレナは手すりに登って海を覗き込む。

「どうだ、魚はいるかい？」

「いなーい」

「そうか、それは残念だな」

「よんだら、くる？」

最初は残念そうにしていた子供達だが、そう言う手を叩いて魚を呼び始めた。

「こいこーい」

これは……池の鯉を呼ぶときにする仕草だ。

餌を貰い慣れている鯉なら寄って来るかもしれないが、海にいる魚は来ないだろうな。

そう思っていたら――

「きたー！」

「え？ 嘘っ!?」

「いっぱいだよー！」

子供達が嬉しそうに歓声を上げたので、僕は慌てて海を覗き込んだ。

「うわっ、本当だ」

すると、大量の魚が密集して、ピチピチと海面から跳ねているのが見えた。

「ここまでいると気持ち悪いな」

船の近くにこんなにも魚が密集していたら、船の進行に問題が起きるんじゃないだろうか？

「何だこりゃあ！」

「うわ、凄えー」

他の乗客も魚に気づいたようで、慌てて船員さんと呼んでいた。

「失礼ですが、お客様。餌を撒いたりはしていませんか？」

「いいえ、していません」

船員さんは、一番魚が密集している場所の近くにいる僕達のところに来る。

あまりにも魚が集まっているので、僕達が餌を撒いたと疑われても仕方ないか。

「よんだら、きたー」

アレンとエレナが場所を移動して、また「こいこーい」と魚を呼べば、大量の魚が子供達の近くへ移動した。

「ほらね」

「「ええ〜」」

その光景を見た船員や乗客は啞然とし、呆れたような、気の抜けたような声を出していた。

「ご覧のとおりですね……餌はあげていないんですが、原因は僕達と言えるのかな？ 船の側面と

不特定多数の人が出入りしている場所の甲板に落ちたものは、食べさせたくない。だからと言って洗うわけにもいかないの、子供達には諦めるように伝える。

「あっ！」

すると、アレンとエレナは、再び降ってきた金平糖を空中でキャッチした。

「これはー？」

「……まあ、それならいいよ」

「わーい」

落ちたものが駄目なら、落ちていないもの……ということだな。

金平糖自体は特に変わったものではなく【鑑定】でも「食用可」となっていたので許可を出すと、子供達は金平糖を口に放り込む。

「おおー」

子供達は感嘆の声を出し、にんまりと笑う。

「美味しいんだ？」

「おいしいー！——あっ！」

また降ってきた金平糖を、二人はすかさずキャッチする。

「とおー」

一定間隔で降ってくる金平糖を連続でキャッチし続けるアレンとエレナ。

「ほら、瓶だよ」

「ありがとう」

それぞれに空の薬瓶を渡せば、二人はすぐに金平糖を瓶に入れる。

「むー」

瓶を振ってカラカラと鳴る音を聞きながら、子供達はむくれる。

「まだ、これだけー」

金平糖は、ポツリ、ポツリ……としか降ってこないの、なかなか数が溜まらずに不満のようだ。といつても、土砂降りのように金平糖が降って来ても微妙な気がする。

「欲しいなら、地道に頑張るしかないね。それとも諦める？」

「……がんばる」

諦めないらしい。

アレンとエレナは、それから時間をかけて薬瓶いっぱいまで空中キャッチを続けた。

「天の雫が降ってきたって船内が騒ぎになっているけど、やっぱりタクミ達は居合わせたか。運がいいなー」

「あ、エヴァンさん、スコットさん、おはようございます。ところで、天の雫って何ですか？」

金平糖はもう降ってこないのかな？　と思ったところで、エヴァンさんとスコットさんが声を掛

けてきた。

「天上から降って来る、極上の甘露かんろと言われているものです」

「これー？」

「ええ、それです。滅多に降らず、降る範囲も狭く、居合わせた者は幸運と言われる品です」

アレンとエレナが金平糖の入った瓶を掲げて見せれば、スコットさんは肯定する。

どうやら金平糖は『天の雫』と呼ばれているらしい。

すると、子供達が持つ瓶を見て、エヴァンさんが声を上げた。

「おっ、かなり集めたな」

「そうなんですか？　子供達はかなり頑張っていましたけど、やっとこれだけって感じですよ？　さすがに甲板に転がったものは拾わせなかったですしね」

「え？　落ちたものを拾わないでこれなのか？　それなら、かなりの量だぞ」

「そうですね。降るのは少量と聞きますし、何より……一定時間が経つと降り注いだ天の雫は消えてしまいますしね」

「えっ!?　あ、本当だ」

スコットさんの言葉を聞いて、慌てて甲板を見下ろすと、アレンとエレナが拾い損ねて転がっていたはずの金平糖、もとい、天の雫は綺麗きれいさっぱりなくなっていた。

「「これもきえるー？」」

「いいえ、それは大丈夫です。拾ってしまえば、何故か消えないみたいなんです。ですので、その場に居合わせた者しか拾えないのです」

「へえー。そんなに凄いものだったんですねー」

僕は改めて、最初に拾った一粒をまじと見つめる。

【鑑定】するために甲板に転がったものを拾ったので、何となく指でつまんだままになっていたのだ。

「これって食べる以外に用途はあるんですか？」

「ん？　どうだろう……俺は知らない。だが、俺が知らないだけかもしれないしな」

エヴァンさんが首を横に振る隣で、スコットさんも頷く。

「私も知りませんね。極上の甘露というくらいですから、食べる以外はないんじゃないですか？　一粒単位でかなりの値がつけられるって聞いたことがあります」

「そうなんですね。じゃあ、一度拾ったものを捨てると、消えるんですか？」

「消えないと聞いています」

じゃあ、この一粒をここで捨てても消えないってことか。

「……タクミ、捨てる気か？」

僕が手に持っている天の雫を持て余しているのを感じ取ったエヴァンさんが、胡乱うろんげな目で見てくる。

「だって、これは甲板から拾ったやつですし……というか、拾い集めたものが売れるんですか？」
うちの子達は空中キャッチだが、普通なら地面に転がったものを拾うことになるだろう。

「売れるぞ。食べるのは……魔法で綺麗にするんじゃないのか？」

「ああ、その手があったか！——《ウォッシング》」

水洗いでもなくても、魔法で綺麗にするという方法があったな！ すっかり忘れていた魔法を、つまんでいる天の雫にかける。

「むう。ひろえた」

甲板に落ちたものも拾えれば、もっと集められたのに……とアレンとエレナがむくれていた。

「ごめん、ごめん。今度は下に落ちたものも拾おう」

「うん！ がんばる」

今回の失敗は忘れずに次に活かそう。そう子供達に伝えると、子供達もやる気を出していた。

「……一度だけでも幸運ですが、もう一度巡り合う気満々なのです」

「……いや、でも、あいつらなら遭遇するんじゃないのか？」

「……それもそうですね」

スコットさんとエヴァンさんは、僕達のやりとりを聞いて呆れたような表情をしていた。

「それはそうと、アレン、エレナ。それは珍しいものみたいだから、人に見せないようにな。あと食べる時はこっそりな」

「はい」

とりあえず、人に自慢するように見せたり、食べたりしないように注意しておく。

「売らないで子供達のおやつにするっていうのが、タクミらしいよな」

「え、だって、全部子供達が拾ったものだから、そうするのが普通じゃないですか？」

「いやいや、そうすることができると保護者は少ないって」

「へえ」

子供から取り上げて売り払って、生活費にするってことかな？ うーん、生活が苦しかったらそうするのか？

「まあ、僕達は生活に困っていませんしね。あ、これ、食べます？」

僕は摘まんでいた天の雫をエヴァンさんに差し出してみる。

「おい。在庫処分のように差し出すなよ」

「綺麗にしましたよ」

「自分で食べればいいだろう……まあ、味が気にならないと言えば嘘になるけどな」

エヴァンさんは正直者だ。

「アレン、エレナ、お願いがあるんだけど」

「なーに？」

「エヴァンさんとスコットさんに、天の雫を一粒ずつあげてくれないかい？」

「うん、いいよ」

味が気になることは確かなので、自分が持っているものは自分で食べることにして、子供達に一粒ずつ譲ってくれないか頼んでみる。

すると、子供達はあっさり了承し、すぐに瓶から天の雫を一粒取り出して、エヴァンさんとスコットさんに差し出した。

「え、いいのか？」

「さすがに悪いですよ」

「おいしーよ」

アレンとエレナは、^{さあ}、受け取れ」とばかりに、エヴァンさんとスコットさんの手を掴むと、二人の手のひらに天の雫を載せる。

嫌がらずに分けてくれるのは、うちの子達の良いところだよ。

「本当に、本当にいいのか？」

「いいよ」

エヴァンさんはしゃがんで子供達と視線を合わせると、念を押すように確認する。

「代金をお支払いしますか？」

「だいきん？」

「お金ですよ」

「いらなーい」

そして、スコットさんは恐縮して代金を支払おうとするが、子供達は即座に断っていた。

「お金より、遊んであげたほうが喜ぶので、そっちでお願いします」

「うん、あそぼう」

一粒いくらになるのか知らないが、子供達にとってはそっちのほうが嬉しいだろうと代案を出せば、子供達は笑顔で頷いた。

それを見たエヴァンさんとスコットさんは「本当にそれでいいのだろうか？」という表情をしながらも、最終的にはそれで納得した。

そして、僕達三人は、天の雫を食べてみる。

「どっ？ どっ？」

「うん、美味しいよ」

「美味っ！」

「確かに美味しいですね」

天の雫は口に入れた瞬間、瞬^{またた}く間に溶けて口の中に爽^{さわ}やかな甘みが広がった。

「ん、美味しいは美味しいんだけど……大金の値が付くほどかな？」

「それは、もう一つの意味合いが原因ですね」

「意味？ 降る場所に居合わせると幸運ってやつ以外にもあるんですか？」

「ええ、口にすると運氣が上がると言われているんです。本当かどうかは定かではありませんけどね」

「運氣ですか」

なるほど、迷信かもしれないけど、信じて欲しがる人が出そうだな。

「ねえ、ねえ、おにいちゃん」

「ん？ どうした？」

「もういつかい」

「ふらないかな？」

「ははは、運が良かったら、そのうちまた遭遇するんじゃないかな？」

「ええ〜〜」

アレンとエレナが天の雫がもう一度降らないかと空を見上げていると、突然——カーンツ、カーンツ……と船内に警報の鐘が鳴り響いた。

「なーに？」

「何だろうね？」

船員達が一気に慌ただしく動き始め、剣呑な雰囲気になる。

「緊急事態みたいですけど、エヴァンさんとスコットさんは行かなくていいんですか？」

「あれは甲板集合の合図だな」

なるほど、甲板に集合なら動く必要はないよな。あつ、確かに護衛っぽい人が船内から出て来るのが見える。

「あ、あれー！」

アレンとエレナが何かを見つけて指を差す。

「あれは……船か？」

まだ遠方だが、少しくたびれた感じの船が見えた。

「来やがったか！」

エヴァンさんが苦々しい表情で悪態をつく。

あの口ぶりということは、あれは昨日話に出ていた賊なんだろう。

「難破船とかの可能性はないんですか？」

「その場合は救援の合図があるはずですよ」

「合図ですか？」

「ええ、煙です。あの船から赤い煙が上がっていません」

「ああ！」

発煙弾！ そういえば、そういうものがあつたな。忘れていた。

「タクミさん、念のために伝えておきますが、わざと救援の合図を出して救助のために近づいた船を襲うという場合もあります。あ、海だけじゃなく陸でもですね。ですから、充分に気をつけて、

状況をしっかり確認してくださいね」

「あ、はい」

スコットさんは、僕が知らないだろうと追加情報をくれる。

賊が発煙弾で獲物をおびき寄せるなんて知らなかったから、本当に助かるわ。」

「今回は、堂々とやって来たけどな！」

「それだけ、戦力に自信があるのでしょうか」

エヴァンさんの言葉に、スコットさんが頷いた。

この船に接近しているのは、海賊船で間違いないようだ。

あゝ……確かに髑髏マークの海賊旗っぽいものが見えるわ。

「……この船に乗っている戦力と、海賊の規模はどのくらいなんですか？」

僕は声を潜めて、エヴァンさんとスコットさんに尋ねる。

「専属護衛は八名。護衛でない船員も武術の基本は心得ていると聞いているが……正直、護身術程度で戦力には数えられないだろう。で、追加の護衛の冒険者は俺達を入れて五名だ」

「あとは乗客に冒険者が何名かいるのを見ましたね。海賊は機動力が高く、かなりの人数だと聞いています」

二人は部外秘には当たらない情報は教えてくれる。

「正面衝突は、正直キツイな」

そう言っただけでエヴァンさん達に、僕はとある提案を試してみた。

「それなら、海賊の船自体をこちらに近づけないようにしたらいいんじゃないですか？」

「は？」

「魔法攻撃が届く範囲に来たら、相手の船に穴を開ける……とか？」

「……」

僕の作戦(?)を聞いて、スコットさんとエヴァンさんは絶句する。

「……捕縛はできないかもしれませんが、いい案かもしれませんね。我々だけでしたら無理ですけど、タクミさんなら可能そうですね」

「だな、かなりの力業だが……良いんじゃないか」

半分冗談のつもりで言った作戦だが、意外と賛同を得られた。

「タクミさん、上に提案してみてもいいですか？」

「え？ あ、はい、大丈夫です」

スコットさんがすぐに、商会専属護衛のリーダーだと思われる人物のところへ向かう。

そして、少し会話をすると、その人物を連れてこちらに戻って来た。

「海賊船が接近していると聞いた時は運がないと思ったが、Aランクの冒険者が乗っているなんて、まだ神に見捨てられていなかったようだな」

相手が僕と顔を合わせた途端、神様に祈り出したので、僕は微妙な気持ちになった。

「えっと……」

「ああ、すまん。俺はガイウス。護衛のリーダーを務めている」

「タクミです。見えないってよく言われますが、Aランクの冒険者です」

「ははは、確かに見えんな。だが、この状況で嘘は言わないだろうから、信じるさ。でだ、魔法で海賊船に穴を開けるって？ 本当にできるのか？」

とりあえず軽く名乗り合ってから、僕はすぐに本題に入る。

「えっと、あの船が鉄鉱石やオリハルコンより硬いつていうなら無理だと思うので、この作戦は聞かなかったことにしてください」

「そんな重いもので船なんか造ったら沈むわ！ 船と言えば、普通は木製だよ！」

「じゃあ、問題ないと思いますね。念のために聞きますが、もし失敗した場合、不利な状況になりますか？」

「多少、相手方が警戒するだろうが、そもそも全力で襲ってくるのは間違いないから、正直、駄目もとても問題ないな」

問題ないのであれば、試すだけ試してもいいな。

「あ、もう一ついいですか？」

「ああ、何だ？」

「そもそも、逃げ切ることできないんですか？」

「無理だな。この船は積載量^{せきさいりょう}を重視した造りだから、船足は遅めだ。逆に、あの船は船足を重視しているようだし」

ああ、そういえば、この船は船足が遅めだって、船の予約をした時に言っていたな。

ということとは、やっぱり戦闘になる確率のほうが高いのか。

であれば、と僕は重要なことを尋ねる。

「沈める気でもいいんですね？」

「ああ、構わない。捕縛は二の次、乗客と船の安全が第一だ。まあ、海賊の船長だけは兵に引き渡したいから、捕縛あるいは死体の確保はしたいところだが……それも気にするな！ 全力で行ってくれ！」

「了解です」

ガイウスさんの許可を得たので、僕は海賊船が狙える場所に陣取り、船が近づいて来るのを待つ。

「もうちょっとな」

「そうだね」

僕の隣にはもちろん、アレンとエレナがいる。

護衛や冒険者達は、こんなところに子供がいていいのかとボソボソと話しているが、聞こえない振りをしておいた。子供達に船室に戻っていると言っても無駄だしな。

「そろそろっ」